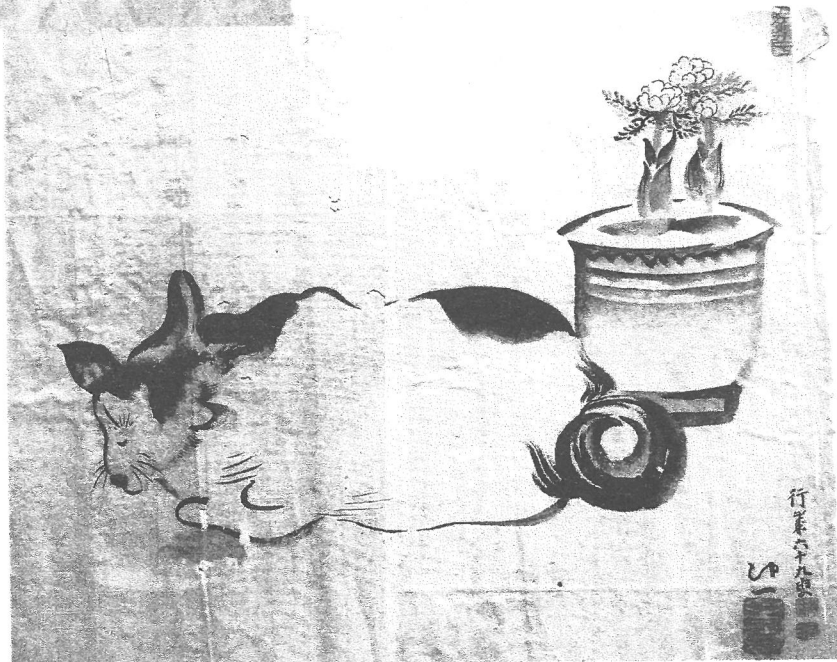


展 示

「幕末に八丁目宿が生んだ 画家加藤候一の世界」



「芭蕉（中央） 其角（右） 嵐雪（左）」
加藤候一画



「眠猫と福寿草」
加藤候一画

- ・日 時 令和3年11月6日(土) ~11月14日(日)
午前10時~午後4時
- ・場 所 松川学習センター 研修室3

主 催 松川町文化財保存会
信達歴史文化研究会
松川学習センター

・奥州街道と八丁目宿

江戸時代には、参勤交代の大名ばかりでなく、多くの人々が旅をし、物資が移動するようになり、五街道を始め街道が整備されました。

街道には人が一日に歩く距離に見合った場所に宿駅（宿場）が整備され、その役割は、幕府が定めた公用の旅行者や参勤交代の大名や公用の物資運搬のために、人や馬を用意して宿場間を継送ること（統括は「問屋」）と休泊（「本陣」）を提供することで、一般旅行者にも宿泊を提供しました。

八丁目宿にもこれら施設が整備されました。福島県の中通りを縦断した奥州街道では、福島市城南端から八丁目宿、若宮宿、清水町宿、福島宿、瀬上宿があり、八丁目宿は最も古い時期に整備されたと言われています。



『ふくしまの歴史絵巻

福島市域の主な街道と宿駅』より作成

- ・米沢街道（１）は、１７世紀後半の上杉支配の終わりの頃までの米沢街道
- ・米沢街道（２）は、１７世紀後半以降の米沢街道

・八丁目宿

「八丁目家主一覧」（『松川のあゆみ』より）で八丁目宿を紹介します。八丁目宿は、八丁目村・鼓ヶ岡村・天明根村からなり、二本松領安達郡と接する南端には物資流通の点検のため「口留番所」を設けられていました。

奥州街道は両側家並みの間を北進、中町でＴ字路となります。街道は右折し直進し、直角に左折します。正面に八丁目宿本陣の桜内家（鼓ヶ岡村）がありました。

左折した場所の問屋場は、宿駅業務を取り扱う場所で、責任者の問屋が詰めていました。宿には検断が置かれ、また、多くの旅籠や木賃宿もありました。

街道は直進しますが、盛林寺先には鼓ヶ岡村検断問屋の植木九郎右衛門の名があります。この付近が宿駅を中心と言えます。検断は人馬継立の事務統括者で、図では他に鼓ヶ岡村検断佐藤治郎兵衛の名が見えますが、八丁目村名主渡辺権左衛門も検断を世襲したと言われています。



図 1

・八丁目宿のにぎわい

八丁目宿のにぎわいについては、江戸前期の井原西鶴が書いた絵入り地誌の「一目玉鉾」（ひとめたまぼこ）に「八丁の目」として「是より二本松の堺なり 遊女ありて物のおかしき所なり」（図 1）と紹介され、また十辺舎一九の「金乃草鞋」（かねのわらじ）にも紹介されています（図 2）。



図 2

国立国会図書館デジタルコレクションより

・八丁目文化

江戸時代末期、宿場町だった松川地区には俳諧、和歌、俳諧歌（狂歌）などが流行しました。その中心人物は天明根村の二峯楼紫明（加藤忠兵衛）でした。

紫明は桑折半田の菅野家から金沢屋加藤家に入り、当地内外に多くの門人を育てました。

『信達一統志』『相生集』の参考書として引用されている『五村雑誌』を著した紫明の子息の谷神斎鶯仏、明治天皇巡幸の際、和歌を献上した斎藤春連（健輔）、二代目十返舎一九著『奥羽一覽道中膝栗毛』の序文を書いた百舌鳥廻舎排（渡辺団七）などが輩出しました。

中でも排は狂歌で名をあげ、江戸の有名な狂歌師、大田南畝（蜀山人・四方赤良ともいった。1749～1823）とも親交があったといえます。

江戸で

“みちのくに過ぎたるものが三つある
石に唐木に鵲の団七”

と謳われたといい、その“鵲の団七”が排こと渡辺団七です。加藤候一こと榊屋銀五郎は排の友人でした。“石”は二本松藩家老丹羽守の雅印を作った篆刻家菅野晋斎（鶴僊）、“唐木”は三味線屋尾形久米吉です。

これらの文芸・工芸などのほか、常磐津、芝居などの芸能も含めて、のちに「八丁目文化」といわれるようになりました。

・加藤 候一

加藤候一は、本名を銀五郎といい、寛政2年（1790）に鼓ヶ岡村中町の榊屋に生まれました。

榊屋は伊勢講中の定宿として繁盛しました。候一は呉服商としても働き、北関東・南東北一円にかけて商圈を広げました。

商売のかたわら、候一は文化的で洒脱で風流を楽しむ趣味人であったといわれています。

平安時代、鳥羽僧正（1053～1140）が始めた鳥羽絵という戯画を巧みに描き、また狂歌にもすぐれ、百舌鳥廻舎排とともに大田南畝とも交流があったといわれます。

現在、候一の子孫、中町の榊屋・加藤貞雄氏宅には候一が描いた鳥羽絵や書など160点あまりの作品が残されています。

非常に勉強家であったようで、手本やスケッチなどの資料も多く残っています。候一の絵に百舌鳥廻舎排が細字で狂歌を書いたと思われる作品もあります。ほかに「加藤家記録」という幕末の当地方の世相を記録した文書が残されています。

松川には浅川の黒沼神社神官、明石重富による「明石家記録」がありますが、「加藤家記録」は、一般庶民の記録として貴重です。

候一は文久3年（1863）73歳で亡くなりました。

幕末に八丁目宿が生んだ画家加藤候一の世界

展 示 目 録

松川学習センター

2021.11.6 ~ 14

No.	題 名	No.	題 名
1	鼓ヶ岡村絵図（福島市史編纂室蔵）	34	正月は嬉し…
2	豊年祭手踊連名	35	秋月同詠山紅葉
3	かたつむり	36	亀寿（鳳山書）
4	おかめ図	37	大黒天図
5	戯歌画賛	38	大黒様
6	怪しさと…油こおろぎ	39	腕力五斗米
7	韓信の股くぐり	40	翁図
8	吉備真備入唐逸話	41	鬼は外
9	語り合う二人	42	袈と刀を忘れた侍
10	翁図	43	下絵綴り
11	芭蕉・其角・嵐雪	44	加藤家記録
12	烏帽子をかぶる男	45	井原西鶴「一目玉鉾」影写本
13	僧と若武者	46	「奥羽一覽道中膝栗毛」序文
14	弓と猿回し	47	
15	傘廻し、羽根をつく女	48	
16	芸者三人と客二人	49	
17	遊女五人図	50	
18	笛吹人と太刀を持つ子供		
19	翁図		
20	谷風		
21	ちょっと一休み		
22	男と女二人		
23	狐図		
24	眠猫と福寿草		
25	猿		
26	山水図		
27	野馬図		
28	鳥と花木		
29	高僧図		
30	高僧図		
31	芋食い僧		
32	被衣女三人		
33	字を書く男		